作成日	2024 年 7 月 1 日
専攻名	家政学部生活福祉学専攻

教育・学習

1．現状分析

自己評価（S・A・B・C

評価項目①

達成すべき学習成果を明確にし、教育・学習の基本的なあり方を示していること。

＜評価の視点＞

・学位授与方針において、学生が修得すべき知識、技能、態度等の学習成果を明らかにしているか。また、教育課程の編成・実施方針において、学習成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。

・上記の学習成果は授与する学位にふさわしいか。

参照資料

・学位授与方針

・教育課程の編成・実施方針

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

「家政学研究科生活福祉学専攻（博士前期課程）学位授与の方針」において、学生が修得すべき能力として、福祉、介護、健康の知見を統合して科学的な視点から理解し、思考できる高度な専門的知識を修得すること、生活問題の原因を科学的に捉えてその問題への対応方法と技術を実践すること、福祉的視点に立脚し、課題を分析するとともに、新たな問題提示および解決の方法や方策を提案することを可能とする高度な専門的知識を活用・運用する能力を習得していることを明示している。

また、「家政学研究科生活福祉学専攻（博士前期課程） 教育課程編成・実施の方針」において、学位授与の方針に示す能力を修得するための教育課程は、基礎科目群、分野科目群、研究指導の 3 科目群から構成され、基礎科目群は福祉に関する事項を多角的に学ぶ科目を配置しており、分野科目群は、福祉、介護、健康科学、生活科学、社会諸制度などに関連する科目を設定し、個別研究の進展を期する群として履修を求め、研究指導については、指導教員の指導により研究上の成果を学位論文として作成すると明示している。

上記の学習成果は授与する学位にふさわしいと考えられる。

自己評価（S・A・B・C

評価項目②

学習成果の達成につながるよう各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。

＜評価の視点＞

・学習成果の達成につながるよう、教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

※　具体的な例

・授与する学位と整合し専門分野の学問体系等にも適った授業科目の開講。

・各授業科目の位置づけ（主要授業科目の類別等）と到達目標の明確化。

・学習の順次性に配慮した授業科目の年次・学期配当及び学びの過程の可視化。

参照資料

・大学院要覧

・シラバス

・学修行動調査の学修時間に関する設問（大学院）

・大学院開講科目数・開講率

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

教育課程編成・実施の方針に基づき、福祉学、介護学、健康科学等を主たる柱として、科学的な視点から理解し、思考する力を身につけ、課題を分析し、問題解決方法を提案できるよう、特論、特別実習、特別研究から成る体系的な教育課程を編成・実施している。学科専門教育としては、1年次には3分野の教員による生活福祉学に関する基礎的な内容の導入科目である生活福祉特論と、4分野の教員による生活科学特論があり、その後、それぞれの教員による生活機能特論が開講されている。少人数でプレゼンテーションや質疑応答・ディスカッション行い、レジュメやレポート作成等のアカデミックスキルを身につける演習科目（必修）を配置している。2年次には分野別科目群により高度な専門知識を身につけるよう科目を配置している。それまでの教育・学習の総括として論文作成を配置している。学位授与の方針と、配置している授業科目との関連については、カリキュラムマップにおいて示しており、カリキュラム全体の体系性については、カリキュラム・ツリーを作成し、オリエンテーションにおいて解説している。

自己評価：(S)・A・B・C

評価項目③

課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。

＜評価の視点＞

・授業形態、授業方法が学部・研究科の教育研究上の目的や課程修了時に求める学習成果及び教育課程の編成・実施方針に応じたものであり、期待された効果が得られているか。

・ＩＣＴを利用した遠隔授業を提供する場合、自らの方針に沿って、適した授業科目に用いられているか。また、効果的な授業となるような工夫を講じ、期待された効果が得られているか。

・授業の目的が効果的に達成できるよう、学生の多様性を踏まえた対応や学生に対する適切な指導等を行い、それによって学生が意欲的かつ効果的に学習できているか。

※　具体的な例

・学習状況に応じたクラス分けなど、学生の多様性への対応。

・単位の実質化（単位制度の趣旨に沿った学習内容、学習時間の確保）を図る措置。

・シラバスの作成と活用（学生が授業の内容や目的を理解し、効果的に学習を進めるために十分な内容であるか。）。

・授業の履修に関する指導、学習の進捗等の状況や学生の学習の理解度・達成度の確認、授業外学習に資するフィードバック等などの措置。

参照資料

・シラバス

・授業アンケート

・学修行動調査（大学院）

・卒業時アンケート（大学院）

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

過去数年の学生では現職の学校教員が多く、平日は多忙なため、土曜・日曜や夏休み・冬休みなどを利用した集中講義により実施するよう配慮している。開講日に関しても、受講者と教員とが相談できるよう配慮しており、シラバスに記述はないがオリエンテーションで説明している。授業中のディスカッションや課題などから理解度を確認し、理解できていない点についてわかりやすくフィードバックしている。特に文献の読み方、統計結果の解釈の仕方、研究方法の具体的方法について説明している。統計に関しては、実際のデータを統計ソフトで処理することにより、理解を深めている。多忙な学生には遠隔授業により対応することもある。授業の履修に関しては、入学時のオリエンテーションと指導教員による履修指導によりこれまで円滑に行われている。アンケートでも学生が十分な支援を受けていることが示されている。

自己評価：Ⓢ・A・B・C

評価項目④
成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。
＜評価の視点＞
・成績評価及び単位認定を客観的かつ厳格で、公正、公平に実施しているか。
・成績評価及び単位認定にかかる基準・手続（学生からの不服申立への対応含む）を学生に明示しているか。
・既修得単位や実践的な能力を修得している者に対する単位の認定等を適切に行っているか。
・学位授与における実施手続及び体制が明確であるか。
・学位授与方針に則して、適切に学位を授与しているか。

参照資料
・シラバス
・授業アンケート
・各科目の成績分布
・学修行動調査の成績評価に関する設問（大学院）
・各種会議の議事録等
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
成績評価の方法はシラバスに記載されており、適正に認定されており、担当教員間でのばらつきもほとんど見られない。また、アンケートからも学生の評価に関する満足度も高い。学位授与に関する手続きについても明確に伝わっており、これまで全員に適切に授与されている。

自己評価：Ⓢ・A・B・C

評価項目⑤
学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。
＜評価の視点＞
・学習成果を把握・評価する目的や指標、方法等について考えを明確にしているか。
・学習成果を把握・評価する指標や方法は、学位授与方針に定めた学習成果に照らして適切なものか。
・指標や方法を適切に用いて学習成果を把握・評価し、大学として設定する目的に応じた活用を図っているか。

参照資料
・卒業時アンケート（大学院）
・学修行動調査（大学院）
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
学習成果について、把握・評価する目的や指標、方法は、シラバスの「授業の到達目標」、「授業の概要」、「授業計画」、「成績評価の方法」において明確に示されている。アンケートでは、とくに不満は見られない。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目⑥ **教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。** ＜評価の視点＞ ・教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価の基準、体制、方法、プロセス、周期等を明確にしているか。 ・課程修了時に求められる学習成果の測定・評価結果や授業内外における学生の学習状況、資格試験の取得状況、進路状況等の情報を活用するなど、適切な情報に基づいているか。 ・外部の視点や学生の意見を取り入れるなど、自己点検・評価の客観性を高めるための工夫を行っているか。 ・自己点検・評価の結果を活用し、教育課程及びその内容、教育方法の改善・向上に取り組んでいるか。
参照資料 ・過年度自己点検評価シート ・卒業時アンケート（大学院） ・進路就職状況 ・過年度の FD の取組企画と振り返りシート ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

現在の専修が改組の予定のため、教育課程に関する点検・評価の体制、方法、結果等については、行っていない。資格試験の取得や進路状況は把握できている。

外部の視点を取り入れることなどは、論文発表会の質疑応答によって実行されている。論文発表会には本専攻外の教員も参加することが多いため、専攻内だけに止まらない意見交換がなされている。

２．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

過去数年間で在籍した大学院生は、現職の養護教諭が多く、全員、在籍しながら 2 年間で単位を修得し、修士論文を書いており、学会発表や論文発表も行うことが出来、1 名は他大学の専任教員として採用されている。

【問題点】

養護教諭としての専修免許が取得できないことが問題点として挙げられる。

３．改善・発展方策

【改善・発展方策】

令和 9 年度改組に向けて、専修免許が取得できる教育課程への改善に取り組みたい。

学生の受け入れ

1．現状分析

自己評価：S・A・(B)・C

評価項目① **学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公平、公正に実施していること。** ＜評価の視点＞ ・学生の受け入れ方針は、少なくとも学位課程ごと（学士課程・修士課程・博士課程）に設定しているか。 ・学生の受け入れ方針は、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法を志願者等に理解しやすく示しているか。
参照資料 ・学生の受け入れ方針 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

学生の受け入れ方針が学位課程ごとに明示できている。求める学生像等を理解しやすく明示できているかに関しては、これまで福祉・介護に重点を置いてきた経緯があり、養護教諭領域の学生については明確でないかもしれない。

自己評価：S・A・(B)・C

評価項目③ **学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。** ＜評価の視点＞ ・学生の受け入れに関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。 ・点検・評価の結果を活用して、学生の受け入れに関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。
参照資料 ・大学院入試志願者推移 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

過去数年の当専攻志望者数は 0～1 名で推移している。この原因として、大学院を修了して得られる資格が十分でないことが挙げられる。現在、本専攻修了後、修士号のみが得られる資格であり、専修免許や他の資格は得られない。

2．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

現在提供している授業は福祉、介護、医療の様々な分野のものがあり、分野をまたいだ研究を行うには魅力的と考えられる。

【問題点】
現在、介護の専任教員はおらず、今後も補充される予定もない。

３．改善・発展方策
【改善・発展方策】
現在の専任教員の構成からは、学校保健やスクールソーシャルワーカーなどの分野に方向転換し、保健教育の教員を加えて専修免許の取得できる専攻へ変更することにより、志望者が増加することが期待できる。

教員・教員組織
１．現状分析　　自己評価：S・(A)・B・C

評価項目① **教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。** ＜評価の視点＞ ・大学として求める教員像や教員組織の編制方針に基づき、教員組織を編制しているか。 ※具体的な例 ・科目適合性を含め、学習成果の達成につながる教育や研究等の実施に適った教員構成。 ・各教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理。 ・教員は職員と役割分担し、それぞれの責任を明確にしながら協働・連携することで、組織的かつ効果的な教育研究活動を実現しているか。 ・授業において指導補助者に補助又は授業の一部を担当させる場合、あらかじめ責任関係や役割を規程等に定め、明確な指導計画のもとで適任者にそれを行わせているか。
参照資料 ・教員組織の編成方針 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
現在の大学院担当専任教員は 6 名で、教授 4 名、准教授 1 名、講師 1 名である。27 科目の特論、特別実習が開講されており、非常勤の比率は 28%である。科目適合性に関してはいずれも研究科委員会の審査を受けている。専任のうち２名は福祉、２名は医学・看護学、２名は健康教育という構成となっており、バランスの良い役割分担となっている。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目② **教員の募集、採用、昇任等を適切に行っていること。** ＜評価の視点＞ ・教員の募集、採用、昇任等に関わる明確な基準及び手続に沿い、公正性に配慮しながら人事を行っているか。 ・年齢構成に著しい偏りが生じないように人事を行っているか。また、性別など教員の多様性に配慮しているか。

参照資料
・教員の性別・年齢構成
・各種会議の議事録等
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

専任教員の性別は、男性 2 名、女性 4 名であり、年齢は 60 歳以上 4 名、60 歳未満 2 名とやや高齢に傾いているが、改組に向けて、新規教員の昇任を控えている影響もある。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目③
教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。
＜評価の視点＞
・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげる組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
・教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
・大学としての考えに応じて教員の業績を評価する仕組みを導入し、教育活動、研究活動等の活性化を図ることに寄与しているか。
・教員以外が指導補助者となって教育に関わる場合、必要な研修を行い、授業の運営等が適切になされるよう図っているか。

参照資料
・過年度の FD の取組企画と振り返りシート
・学修行動調査（大学院）
・卒業生アンケート（大学院）
・各種会議の議事録等
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

毎年、学科とともに FD の取り組みを実施している。学生の授業アンケートなどから、これまで ICT に関する研修や、シラバスに関する研修を実施し、ほとんどの教員が参加した。一部研修では、学生の参加も行い、教員と学生の ICT に関する知識向上がはかられた。今後、フィードバックに関する要望を踏まえ、シラバスへの記載とともに、よりよい方法への改善を模索し、新たな研修計画を考えている。

自己評価：S・A・(B)・C

評価項目④
教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。
＜評価の視点＞
・教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
・点検・評価の結果を活用して、教員組織に関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料
・各種会議の議事録等
・過年度自己点検評価シート

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

教員組織に関わる点検・評価プロセス、現状、成果、課題、これに基づく改善・向上への取り組み状況については、改組を控えて行っていない。

２．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

福祉分野と学校保健分野を専門とする専任教員が複数存在すること、学部教育で養護教諭や社会福祉士、スクールソーシャルワーカー志望の学生が多数いる。

【問題点】

教員には高齢化の傾向がみられる。

３．改善・発展方策

【改善・発展方策】

将来的に若くて、大学院担当可能な教員の補充ができればより魅力的な大学院となると考えられる。